

アーティストの 一日館内授業

30周年記念特別ワークショップ

記 録 集



スクールプログラムの一環として 2001 年度から実施している「アーティストの一日学校訪問」は、当館所蔵作家が特別支援学級・学校を含む都内の小学校から高校までを対象に年間 6 校訪問し、オリジナルの授業を行う事業です。本事業は、美術館への来館がむずかしい遠方の学校へアーティストが直接赴くことで、現代美術に触れる機会を広げるとともに、独自の視点で制作を行うアーティストとのコミュニケーションを通じて、児童生徒が新たな感性や価値観に出会うことを目的としています。アーティストごとに異なる視点から展開されるオリジナルの授業は、多様な表現活動と出会うだけでなく、新たな考え方や物事のとらえ方を知るきっかけともなっています。また、通常の訪問授業に加え、特別編として多摩地域限定や特別支援学校・学級限定でも実施し、これまでに 26 名/組のアーティストが、延べ 180 校以上を訪問しました。毎年新たなアーティストが担当する本事業は、数多くの学校から応募が寄せられる人気のプログラムとなっています。

今回、当館開館 30 周年を記念した教育普及事業の特別企画として、訪問授業の場を学校から美術館へと移し、これまでに担当いただいたアーティストの中から選定した 4 名によるワークショップを実施しました。過去の訪問授業をベースとしながらも、子どもから大人までの多様な背景を持つ方々を対象とした東京都現代美術館バージョンとして再構築し、アーティストが企画する独自のワークに親しむ機会を創出しました。本記録集をとおしてワークショップの内容をご紹介しますとともに、より多くの方に取り組みの一端に触れていただけるよう、当館ウェブサイトで実施内容を短く編集した動画もあわせて公開しています。アーティストが何を考え、どのような体験の場を作り上げたのか、多くの方にご覧いただければ幸いです。

最後に、本企画の実施にあたり、多大なるご協力を賜りましたアーティストの皆さまに心より御礼申し上げます。

東京都現代美術館





WS 記録動画

注文の多い工作

～わかりませんが完成はします～

かいはつ よしあき

企画・指導：**開発好明** (美術家)

開催日時：2025年9月6日(土)
13:30～16:00
対象：小学4年生から大人まで
(小学生は保護者同伴)
参加者：27人
参加費：500円
場所：東京都現代美術館 講堂
アシスタント：服部圭能



概要

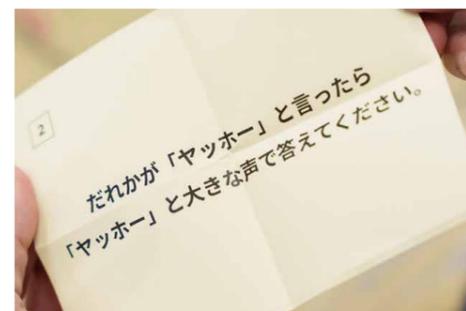
ミッションが書かれたくじを複数回にわたって引き、そこに記された指示にしたがって作品を制作していくプログラム。ミッションは、直接作品制作に関係するものもあれば、他者とのコミュニケーションや身体性を伴う表現など多岐にわたるため、参加者はミッションを自由に解釈しながら作品制作に取り組みました。ミッションによって創作の過程が導かれることで、偶然性に満ちた自由な創造のプロセスを実感する機会となりました。



小学生から大人まで幅広い世代の参加がありました。それぞれの創造力を活かして活動に取り組みます。



参加者はくじ引きボックスからミッションを引き、その指示に従って行動や制作を行います。まずは、必要な材料や道具を選び、各自制作スタート！



ミッションは、直接的に制作に関わるものから、他者とのコミュニケーションや身体性を伴う表現まで様々。予測不能かつユーモアのある展開が続きます。



途中で「館歌タイム」も発生！今回のために開発さんが作詞作曲した「館歌」を全員で歌いました。一時的に制作の手を止める時間が設けられ、空間全体に一体感と笑いが生まれたのも「館内授業」ならではの空気感です。



その後も数回のミッションを経て、参加者は様々に工夫を凝らしながら最終的な作品を完成させていきます。完成したら、互いの制作物の鑑賞会です。



どの作品も偶然性と多様なアイデアに満ちており、自由な創造のプロセスを実感できる作品ばかりです。開発さんからのコメントを受けながらプログラムは終了しました。

企画・指導：開発好明 (美術家)

2004年にヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展、2006年から越後妻有大地の芸術祭、2016年市原湖畔美術館にて個展「中2病展」、2019年東京都現代美術館にて「あそびのじかん」展、2024年東京都現代美術館にて個展「開発好明 ART IS LIVE ひとり民主主義へようこそ」など観客参加型の美術作品やワークショップを中心に活動を行う。2025年には令和6年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2000年から20年間継続した、3月9日「サンキューアートの日」の企画者としても知られる。2011年以降にはデイリリーアートサーカスを主催し各地の慰問を行った。



参加者の感想 (一部抜粋)

- 正解がない世界は不安ですが、楽しいものですね。
- 評価などをされない、好きなものを作るというのが良かったです。
- 予想外のことが多く楽しい時間を過ごせた、おもしろい体験だった。
- 子供に戻った気分が夢中になりました。
- 何ができるか分からない感じと、会場全体に徐々に一体感がうまれていく感じが新鮮でした。



WS 記録動画

木のかたまりから何かを彫りだそう

たなだ こうじ

企画・指導：棚田康司（彫刻家）

開催日時：2025年9月27日(土)
13:30~17:00
対象：中学生以上から大人まで
(視覚障害のある方も歓迎)
参加者：7人
参加費：6,000円
場所：東京都現代美術館 スタジオ、講堂
アシスタント：上野聖人、青田大和



企画・指導：棚田康司（彫刻家）

1968年兵庫県明石市生まれ。神奈川県在住。東京藝術大学大学院彫刻専攻を修了後、日本古来の木彫技法である「一木造り」によって人間像を彫りつづけている。その作品は、大人と子ども、人間と自然、個人と社会の「あいだ」といった境界線に存在し、無限の広がりを感じさせる。近年の主な個展に「たちのぼる。」(練馬区立美術館/伊丹市立美術館、2012-13年)、「O JUN×棚田康司 関(せめぐ)」(伊丹市立美術館、2017年)、「線上に幅を 空間に愛を」(井原市立平櫛田中美術館、2023年)など。2022年、第30回平櫛田中賞受賞。

概要

一人ずつ用意された直方体のクスノキ(15×15×30cm)に向き合い、木の手触りを感じながら、ノミヤツチ、ノコギリといった道具を用いて思いが向くままに形を彫り出すワークショップ。道具を使うことが難しい場合は、棚田さんや彫刻家のアシスタントの方々が“道具”となって、参加者の具体的な指示をもとにノミヤツチを振り、形作りをサポートします。木の香りやノミとツチを振る音、木の手触りなど、視覚障害の有無にかかわらず五感いっぱい味わえる本ワークショップには、全盲の方も1名参加しました。



ワークショップは、くじ引きで引き当てたクスノキと向き合う時間からスタート。



棚田さんから作品紹介と今日やることの説明です。発想の源についてもお話がありました。



特別に触らせていただける作品も持参いただきました。



彫りたい形によって木目の向きを考慮ことや大きく形を切り出すためにはどこからノコギリを入れるかといったアドバイスも。



クスノキにノコギリやノミが入り始めると、スタジオ全体に清涼感のある香りが広がっていきました。初めてノミヤツチを使う方も多くいましたが、驚くほどの集中力で制作に没頭していました。



ここぞという場面では、棚田さんやプロの彫刻家のアシスタントが形作るお手伝い。



全盲の参加者の方も、彫刻家たちのサポートを得ながら、できる部分は自身で作業を進めていきます。



約4時間の制作時間は、あっという間に過ぎ、最後に講堂に移動して、作品発表を行いました。



「ノミが走っていましたね」などと、棚田さんから一人ひとりにコメントがありました。



同じ大きさの木のかたまりから生まれた作品は、1つひとつ異なる表情をみせており、参加者それぞれが木と向き合った時間や思考の積み重ねが形となって表れていました。

参加者の感想（一部抜粋）

- 大きな木材を扱えたり、ノミ等の家ではなかなか使えない道具に触れて良い体験になりました。
- ノミで彫り出す木くずが飛んでくるような臨場感や、木の香り、ツチの音など創作空間に浸れる時間で満足度が高かったです。
- 大人になった今では、先生に教わる授業の機会がなかったため、楽しく参加できました。
- お話できて楽しい時間は宝物のようです。木彫との出会いの話や学生時代の話が伺えて、これからの自分の仕事や人生に向き合う時に思い出そうと思います。



現代美術を通じて、 他者の存在について 考える

あおやま さとる
企画・指導：青山 悟 (美術作家)

開催日時：2025年11月8日(土)
13:30~16:00
対象：小学3年生以上から大人まで
(小学生は保護者同伴)
参加者：19組38人
参加費：500円
会場：東京都現代美術館 講堂



概要

工業用ミシンを用いて、労働やジェンダーに関わる社会問題に切り込む刺繍作品で知られる青山氏によるワークショップのテーマは、「現代美術を通じて、他者の存在について考える」。既存の方法にとられない表現のプロセスを重視した複数のワークによって構成されており、自由な発想で表現するための準備体操を始め、思いもよらぬ方法で描くドローイング、他者との共同によって作り上げる絵画といった3つのペアワークを通して、他者との境界線や存在について向き合う機会を創出しました。



応募条件は、二人一組で参加すること。親子や夫婦、友人同士など、様々な関係性のペアが参加しました。



制作の背景の紹介も交えながら、青山さんが持参した刺繍作品を間近で鑑賞する時間も。他者の存在について考えるきっかけとなるようなお話もありました。



“他者の存在について考える”ために取り組んだ1つ目のワークは「二人で一つの漢字を書く」。一切相談せずに互いの力の均衡を感じ取りながら、『今年を表す漢字』を書きました。



続いて取り組んだのは「ジャンピングドローイング」。1分間ジャンプし続けながら、相手の姿を描くというワーク。身体全体が揺れ動く中で描き続けるハードな体験を経て、自分の意思だけでは描くことのできない絵が完成。



最後に時間をかけて取り組んだのは、四つ切サイズの画用紙に、赤・青・黄・白の絵具を使い「平和」をテーマに二人で1つの絵を描くワーク。筆を持つことも、色を選ぶことも、混色することも、紙のどこに何を描くかも、会話はしないことがルール。1本の筆を介して相手の動きを感じ取りながら取り組みます。会場には、クスクスと笑い声が響きわたっていました。



作品が完成したら、まずは自由に会場内を巡り、参加者同士での作品鑑賞を行いました。



制作を通して感じたことを交えながら、一組ずつ作品発表。友人同士で参加したペアからは、「相手が手を添えてくれる様子もあり、描くプロセス自体が平和だった」という感想が聞かれました。



20代の娘さんと母親のペアによる《自由、誕生》。赤ちゃんが生まれるイメージをもとに描かれた作品です。ペアごとに全く異なる印象の作品ができ上がりました。



企画・指導：青山 悟 (美術作家)

1973年東京都生まれ。工業用ミシンを用い、近代化以降、変容し続ける人間性や労働の価値を問いながら、刺繍というメディアの枠を拡張させる作品を数々発表している。ロンドン・ゴールドスミスカレッジのテキスタイル学科を1998年に卒業、2001年シカゴ美術館附属美術大学で美術学修士号を取得。近年の主な個展に、「刺繍少年フォーエバー」(目黒区美術館、東京、2024)。「開館30周年記念展 日常のコレオ」(東京都現代美術館、東京、2025)、「ワールド・クラスルーム：現代アートの日語・算数・理科・社会」(森美術館、東京、2023)、「Re construction 再構築」(練馬区立美術館、東京、2020)、「Unfolding: Fabric of Our Life」(Center for Heritage Arts & Textile, 香港、2019)など国内外の展覧会に多数参加。

参加者の感想 (一部抜粋)

- 参加した方々のそれぞれの視点が新鮮で、気づきをいただきました。
- 絵を描くのが苦手ですが、それでもとても楽しめました。現代アートは意味不明で好きではなかったのですが、アートを通じて、人に届くもの、つながるものという体験が新鮮でした。
- 青山さんの考えを伺うことができ、現代美術をはじめとする芸術に対する理解がより深まったと感じます。
- 座学ではなく体験メインで他者の存在を感じることができました。冒頭に現代美術や作家についての説明もあり、ただ絵を描いて楽しいだけでなく、わかりやすかったです。

光る線のダンス！ ／映画の始まり

いしだ たかし

企画・指導：石田尚志 (画家／映像作家)

開催日時：2025年11月15日(土)
13:30～15:30
対象：どなたでも (小学生以下は保護者同伴)
参加者：26人
参加費：500円
場所：東京都現代美術館 講堂
アシスタント：川添 彩(映画監督)、川本直人(映像作家)、
渡邊 洵(美術家)、山本圭太(照明家)



企画・指導：石田尚志 (画家／映像作家)

東京都生まれ。線をコマずつ描いては撮影するドローイング・アニメーションという手法を用いて、空間のなかに増殖する線や移動する点といった運動性を介入させ、空間の質を容容させるインスタレーションを発表している。近年の主な展覧会に、「絵と窓の間」(神奈川県立近代美術館葉山、2024年 アーツ前橋、高松市美術館、2025年)、「弧上の光」(国際芸術センター青森、2019年)、シャルジャ・ピエンナーレ 13(2017年)、あいちトリエンナーレ(2016年)、「渦まく光」(横浜美術館、沖縄県立博物館・美術館、2015年)など。2025年第75回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。多摩美術大学教授。

概要

映画の16mmフィルム(黒味・素抜き)に、油性マジックを使って直接描画をしたり、ニードルを使い表面を削って傷をつけるなどの表現を自由に行い、100年以上前に誕生した映像の始まりを体験するプログラム。最後には、参加者が描画したフィルム同士を繋げ、映写機で上映しながら全員で鑑賞会を行いました。フィルムに直接描くという身体的かつ原始的な表現行為が、映像の持つ時間性や素材性への新たな気づきを促し、参加者の創造性を刺激する内容となりました。



プログラム冒頭、石田さんの映像作品も一部紹介されました。線が動き出すような独自の表現世界に、参加者はこれから体験する内容への期待を膨らませていきます。



フィルム映像の仕組みを教えていたらいたら、制作スタート！



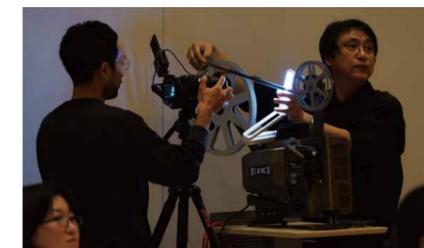
黒味と素抜きのフィルム片が配布され、参加者は自由に描画を行います。



黒味のフィルムにはニードルで、素抜きのフィルムには油性ペンを使って線や形を刻むように描いていく過程は、普段の紙への描画とは異なる新鮮な体験です。参加者はフィルムという素材の特性を楽しみながら、思い思いの表現を生み出していきます。



各自が描き上げたフィルム片を1本に繋ぎ合わせます。



個々の線や模様が一本の長いフィルムとして繋がったら、いよいよ鑑賞の時間。完成したフィルムを実際の映写機に通し、会場を暗転して上映を行いました。



描かれた線や色が光を受けて動き出すと、参加者からは驚きや歓声が漏れます。手作業による映像の魅力が強く感じられるひと時となりました。



参加者それぞれが生み出した「光る線」の多様性や、つなげることで初めて見えてくる偶然の動きの面白さについて石田さんからお話があり、プログラムは穏やかな雰囲気の中で終了しました。

参加者の感想 (一部抜粋)

- 映画のしくみを学びながら「作る」のがとても面白かったです！
- フィルムを見る機会がないので、親子で楽しめました。
- 上映の試みがとても面白く、自分ひとりで黙々とやっているよりも大勢で取り組む楽しみがあり、大変良かったです。
- ワークショップ最後の、映像をいくつも重ねていく即興の時間は、そのライブ感にとってもワクワクしました。



かいはつ よしあき
開発好明

今回のワークショップ (WS) は、タイトルに秘められた通り、参加者の方々へ「豊かなきっかけ」をご提供することに重点を置いています。過去にも五箇所の学校で同様のワークショップを行い、その都度学校ならではのミッションを加え独自性を持たせています。最初は、穏やかな制作活動からスタートしますが、時間が経つにつれて、まるで遊び心あふれるようなユニークな課題が皆さんに課され、制作のプロセス全体が、発見に満ちた予測不能な体験へと姿を変えていきます。このWSが大切にするのは、作品の仕上がりにおける「美しさ」だけではありません。むしろ、そこに至るまでのプロセスや、予期せぬ出来事から生まれる「驚きや戸惑い」に光を当てています。

予期せぬミッションが誘う「非日常」

WSが進むにつれて、「自分だけのミッション」を受け取った参加者の方々は、これが単なるものづくりではないことに気づき始めます。周囲では、急に立ち止まって挨拶を交わし始める方、額に紙を貼ってあえて視界を制限しながら集中するお子さんなど、実に多様な行動が自然発生し、会場は次第に活気に満ちた、楽しい「ざわめき」に包まれます。これらのミッションは、通常の「正しい作り方」という枠組みから皆さまを解放し、自己表現の新しい扉を開くトリガーとなるのです。

意図を超えた作品の「多様な魅力」

驚くべきことに、そうした自由で混沌としたプロセスを経て完成した作品は、どれ一つとして同じものがなく、全員が異なる、独自の魅力を放っています。このワークショップは、参加者が創造性やコミュニケーションの力を刺激される内容です。作家自身も、毎回参加者の方々がおどのような「予期せぬ物語」を生み出すのかを楽しみにワークショップに臨んでいます。

最後に今回は美術館でのWSだったので中だるみする時間帯に東京都現代美術館の館歌を作ったので全員で合唱しました。突然の歌で難しさや気恥ずかしさはありましたが一つのワークショップをより魅力的な内容に押し上げられたのではと自己満足しています。



たなだ こうじ
棚田康司

2017～2018年にかけて、東京都現代美術館の依頼により都内5校で授業を行った。その中に、『木の塊から大切な人を作ろう』というテーマのワークショップがあった。10名ほどの高校生たちは皆弱視または全盲で、僕と若い彫刻家二人が作業の手伝いをする。彼らは触りながら形を把握し、「ここをこのように彫ってください」と要望を伝え、私たちはそのように彫る。そうやって一緒に彫り進めていった。形を確かめる彼らの指の動きは実に繊細で的確で、驚くほど集中しているのがわかる。彫刻は触覚の芸術と言われるが、改めて自分の手と眼について考えさせられる経験となった。最後の講評で「誰を作ったのか」と尋ねると、「お母さんです」と答える生徒が複数いたことも印象に残っている。

2025年初秋、再びのワークショップの依頼は、『木の塊から何かを彫り出そう』というテーマにした。抽選で選ばれたという7名の方（全盲の方も含む）が参加して下さった。彫り始めると同時に、樟独特の強い香りが立ちのぼり空間に充滿する。この香りはどうも人を覚醒させるのか、鑿や鋸の音のリズムと重なって参加者の集中を深めているようだった。4時間、休憩をとることも忘れ、自分と向き合い、作りたい形を目指して黙々と制作されていた。気迫のオーラを感じたために、作業終了を告げるのをためらったほど。お一人ずつから感想を交えたひと言を聞いた時は、ものづくりの幸せを感じた瞬間だった。

この二つの体験は、素材と向き合い、手を動かして形を生み出すという、古代から続く人間行為の原点へと僕を立ち返らせてくれる。ワークショップを企画実現させてくれた美術館スタッフの皆様には、心から感謝申し上げたい。



あおやま さとる
青山悟

両親、友達、学校の先生など、「他者の存在について考える」ことは誰もが毎日当たり前に行っている行為です。しかし結局のところ他者が本当に考えていることなんてわからないし、それゆえに腹が立つこともあれば、逆に自分では想像もつかなかった気づきや喜びを与えられたりもします。

2024年からMOTと共同で行った学校訪問とワークショップあわせて7回のうち6回は小中高生が対象でした。やはり思春期が近づくと他者を過剰に意識してしまうようです。それが自己表現の美術、しかも「現代アートを通じて他者の存在について考える」などと言われれば構えて当然です。とは言え、実際のところは最初から積極的にこちらの趣旨を理解し、素晴らしい成果を残してくれた子がほとんどでした。毎回ワークショップでは子どもたちの発想の豊かさに驚きます。しかし時間が経つにつれ印象に残っているのは、それこそ思春期特有の目をしながら反抗的な態度を取り続けていた子たちだったりするのです。美術に興味がないような素振りをしながら実は1番自己表現をしていた子たち。ジャンプをして絵を描くのも、隣の子と2人で1本の筆を持って絵を描くのもさぞ恥ずかしかったことでしょう。実のところ、教育というのは他者からのコントロールを受ける（与える）という意味で、ハラスメントと紙一重だったりします。「正当」か「不当」かが唯一の分かれ道です。正直に言うと今回こちらが用意したプラクティスには、正当な教育目的と教育の場にはひょっとすると不当かもしれない一人のアーティストによる「こういう光景が見たい」という表現欲求が混在していました。他者にとっての利益を自分のエゴと切り離して考えることは、こんなにも難しいことなのです。一見反抗的で、他者を簡単に受け入れようとしない子どもたちの態度は、このワークショップにおいては実はとても素直で人間らしいものだったとも言えます。



いしだ たかし
石田尚志

16mmフィルムに直接絵を描いて映画を作る事は、さほど難しいことではない。細いフィルムのエマルジョンを引っかくなり油性マジックで点や線をおいてみれば、それが何であれ映写機にかけるとアニメーションになる。別にキャラクターが歩いたりする必要はない。フィルムに置かれたキズは光となって、映画の瞬きになるのだ。その明滅は揺れる松明や遙か水平線へと続く海原の光る道を、時間のままに記録してみせた映画の本質なのだ。

もう何年も前のことになるが、都現美のこの企画で行った特別支援学校でのワークショップは、自分にとって極めて大きな出来事であり、それはこの瞬く光がもたらした奇跡だった。彼らは途方も無いエネルギーでフィルムに絵を描きはじめ、あっという間に机の上に広がる台紙にも絵が溢れていった。一瞬のことだった。そしてそのまま彼らは疲れ果て倒れていったのだ。休憩して、暗い部屋で映写機にフィルムをかけると、彼らはスクリーンに投げかけられる光へ駆け寄って思い思いの影をつくり踊りが始まっていた。不思議で楽しい出来事がいくつもあったが、その全てを言葉に残すことはできない。その圧倒的な集中は、表現とか、作品がどうということではないもっと遠いものだった。その光景は自分の中で映画のように繰り返されている。帰りがけ、その支援学校の先生の一人が駆け寄って声をかけてくれた。いままで一度も笑ったことが無い子が笑ったのだと。

「アーティストの一日学校訪問」(2001年度～)

現代美術の普及と理解を深めることを目的に、当館の収蔵作家等が都内の小中高等学校、特別支援学校を訪れ独自の授業を行うプログラム。現在活躍中のアーティスト(2008年度以降は、当館収蔵作家に限定)との交流を通して、最新のアートを体験する授業を実施した。実施校については、都内の学校に向けて募集要項を送付し、応募があった学校から選定することを基本とした。なお、2007年度からは学校からの要望にも対応し、特別編として、過去に実施したアーティストによる訪問授業も行った(当館主催の特別編の学校訪問については※を付した)。

年度	訪問アーティスト	授業案	内容	特別編
2025年度	松井えり菜	『描こう!話そう!重ねよう! みんなで作るアートなコミュニケーション!』	「実践!アートなコミュニケーション!」 「カサネアート 清瀬エディション」 「《ヴィーナスの誕生》多面相」 「《春》多面相」 「顔三昧」 「おもいっきり自画像!」	
2024年度	青山 悟	『現代アートを通じて、他者の存在について考える』	「他者へのプレゼント」 「二人で1つの漢字を書く/ジャンピングドローイング/二人で1つの絵を描く」 「友達に贈るパッチを作る」 「マインドマップ(お気に入りのものの社会的背景を考える)」	
2023年度	片岡純也+岩竹理恵	『ものごとが動く、物とまわりの力の観察』		
2022年度	潘 逸舟	『自己を見つめることと表現』	「自分が思う一番下手な絵を描いてみる」 「美術の中に自分の場所を見つける」 「自分と学校の記憶を記録する～フロッタージュで自分だけの絵を作る～」 「ついに開花!自分の花を咲かせよう!」 「自分の居場所を記録する」 「自分鏡-自分を見つめる鏡をつくる」	
2021年度	風間サチコ	『ユーモアを交えながら考えを上手に伝える方法』	「正直マスク」	
2020年度	開発好明	『注文の多い工作～わかりませんが完成はします～』		特別支援学校・学級限定:内海聖史※
2019年度	梅沢和木	『自分地図をかいてみよう!』	マインドマップ作り	特別支援学校・学級限定:山川冬樹※ 特別編:内海聖史
2018年度	末永史尚	『制作したもので身の回りのもの見かたが変わる体験について』	「物の影をつかまえる」 「アーティストによる自作紹介&見慣れた場所で展示する作品をつくるワークショップ」 「身の回りのものを塗りつぶしてみる」 「組み替え絵画をつくる」 「かわる絵でかわれ場」	
2017年度	秋山さやか	『わたしの思い出あなたの思い出』	「"あの思い出の宝箱"-他人の思い出を保管する「いれもの」をつくる」 「"かさねる手紙"-他人の思い出に自分の思い出を重ねる」 「誰かへの『宝箱』」 「ことばの宝箱」	
	棚田康司	『粘土を使って立体をとらえる感覚を体験しよう』	「粘土のかたまりから自分を彫り出そう」 「巨大な先生の顔をつくろう!」 「大きな先生の首像を作ろう」 「一緒に彫刻をつくろう!」 「大切な人を作ろう」 「身近なもので先生の頭部をつくろう!」	

教育普及プログラム
「アーティストの1日学校訪問」記事一覧
<https://www.mot-art-museum.jp/blog/education/school/artist/>



年度	訪問アーティスト	授業案	内容	特別編
2016年度	浅井裕介	『絵が生まれてくる場所は、どこにでもある!』	「歩き出した大地」 「土の森をつくろう」 「"緑の小木"をつくろう」 「自分たちの感情をかたちにしよう」 「点と線の宇宙」	GO WEST 西へ!! "多摩地区限定": 内海聖史、石田尚志、泉太郎、山川冬樹※ 特別編:関根直子、森千裕
2015年度	関根直子	『動きや速度をイメージした線の抽象表現-描く事で自分自身を体験しよう』		森千裕
2014年度	森千裕	『どこから来るの?この気持ち一わけのわからない感覚と向き合ってみよう』	「小さな落書きを巨大化してみよう!」 「今はないものを絵に描いてみよう」 「小さな自分の『仏像』を作ってみよう!」	泉太郎
2013年度	富井大裕	『ファウンドコンポジション-学校にある彫刻を発見して別の場所で作り直してみよう(説明書付き)』		内海聖史
2012年度	石田尚志	『時間を描く!音楽を描く!』		
2011年度	山川冬樹	『もっとも身近なメディア「からだ」の響きで表現しよう!』		
2010年度	泉太郎	『自分でルールを考えよう、ルールを飛び越えた新しいルール』		
2009年度	石川直樹	『アーティストという仕事について、作品鑑賞と冒険のお話』		
2008年度	内海聖史	『アーティストの仕事のお話とその制作の秘密を体験』	「かっこいい緑色(紫色)をつくろう」 「一から絵をつくろう」	
2007年度	佐藤一朗	『アーティストの仕事のお話、作品を体験、そしてみんなで作ってみよう』	履けないクツ作り	天利道子
2006年度	荒木珠奈	『ピニャータをつくろう』		
2005年度	天利道子	『自分だけのTシャツを作ろう』 『自分の色をみつけよう』	「ひびきあう色と心・・・愛をテーマに」 「自分をあらわす色」 「自分だけのTシャツをつくろう」 「自分の色を見つけてよう!」 「ひびきあう色と心 夢を色にこめて」	
2004年度	KOSUGE1-16 (土谷享+車田智志乃)		「西愛宕小の隠れた名所マップをつくろう」 「トイレットペーパーを素材とした作品制作と講習会」 「ピクトグラムをつくろう」 「アーティストから生徒たちへ」 「学校探検マップをつくろう」 「西小菅小の秘密マップ」	
2003年度	栗田宏一		「土から絵の具を作る」 「アーティストに挑戦!」 「根岸色を探す」 「美術館見学を終えての質問」 「土についてのディスカッション」 「御蔵島の土を採集する」 「御蔵島と日本全国の土の鑑賞」	
2002年度	笠原 出	『びっくりマスクdeポン!』	紙袋を使ってマスクを作る	
2001年度	土屋公雄		スライドによるレクチャー	

※地域や対象を限定した特別事業や学校からの個別の依頼に対して実施した。



30周年記念特別ワークショップ アーティストの一日館内授業 記録集

テキスト：鳥居 茜(pp.4-5,6-7.)、荒井美月(pp.2-3,8-9.) (東京都現代美術館)
開発好明、棚田康司、青山 悟、石田尚志

編集：鳥居 茜、荒井美月 (東京都現代美術館)

編集補助：高橋史子

デザイン：進士 遙

記録写真：富田了平

発行：東京都現代美術館 〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1

発行日：2026年3月31日

©2026 東京都現代美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)